

<平成28年>

12月度 IC (MRA) 交流会のお知らせ

晩秋の候、皆様にはお変わりなくお過ごしのことと存じます。

さて、平成28年12月度の交流会は、下記の要領により開催いたします。

今月は、恒例のテーマ「ICと私」から離れ、本協会理事の金生郁子氏（福岡香蘭女子短期大学講師）に特別テーマ「北アイルランド紛争を解決に導いたエンカウンターグループの記録」で語っていただきます。ビデオ鑑賞と解説で1時間30分を予定しています。

先ず、講師によるビデオ「鋼鉄のシャッター」(1973)の概要解説の後、ビデオを鑑賞します。このビデオは、北アイルランド紛争を解決に導いたカール・ロジャースによるエンカウンターグループの記録です。(3日間24時間の内容を約1時間にまとめている)

*「鋼鉄のシャッター」の意味：人は自分が正気であるために本当の自分を隠すシャッターを持つ。シャッターがなければ、皆気が狂ってしまう。

当日は、同名の著書から抜粋したものを資料として配付し、講師が解説。原著者はパトリック・ライス（イエズス会聖職者であったが、このプロジェクトのために平信者の地位に戻る）。北アイルランド・英国・アイルランド共和国の過去の歴史とそれを背負った人々の物語り。エンカウンター実行前（カトリック教徒とプロテスタント教徒が合い対立する葛藤状態）から北アイルランドでの準備・調査と実際のエンカウンター（向き合っの語り合い）の記録。その後ノーベル平和賞受賞（1998）に至る流れについて解説。

民族と宗教の葛藤と紛争に悩む現代世界にあって、何かのヒントとなるものが伺えると思います。この機会に、是非ご参加くださいますようご案内申し上げます。

記

日 時：平成28年12月18日（日）14:00～16:00

場 所：ICオフィス

会 費：一般：500円 学生：300円 留学生：無料（お茶をご用意します）

*参加のお申し込みは返信用紙にご記入の上、Fax(03-6273-1429)でお送り頂くか、電話(03-6273-1428)、或いは、Eメール（清水葉子宛）<alicecafe25@gmail.com>でお願いいたします。

公益社団法人国際 IC 日本協会

◇会場へのご案内

IC オフィス 新宿区四谷 4-28-20 パレ・エテルネル 206 号

（最寄り駅は、地下鉄丸の内線「四谷三丁目」か「新宿御苑前」。「四谷三丁目」

からは徒歩約10分、「新宿御苑前」からは徒歩約8分。四谷四丁目の交差点が目印です。

そこからは約1分。新宿通り側の最初の路地の奥にある茶色の煉瓦のビルです。事務所用の入口から入って、エレベーターで2Fに上がって下さい)

以上

返信

公益社団法人国際 IC 日本協会 行き

12月度 IC 交流会

平成28年12月18日(日) 14:00~16:00

氏名 _____

所属 _____

ご同伴者氏名 _____

メールアドレス _____

電話 _____

公益社団法人国際 IC 日本協会

FAX 03-6273-1429

北アイルランド紛争を解決に導いたエンカウンター・グループの記録

北アイルランド紛争は1969年（昭和44年）アメリカでキング牧師公民権運動に影響を受け、イギリスが支配する北アイルランドにおいて泥沼の都市ゲリラ戦が激化した一触即発の危機状態をいう。遠く離れた日本でもNHK海外ニュースは北アイルランドのテロ報道で埋められ、IC九州サークルリーダー井原伸允先生は行きつけの理髪店の店主が話題にするほどであったと紹介された。そもそも、アイルランドと英国には12世紀末より歴史的抗争、経済的な軋轢、宗教対立の積み重ねがあり、憎しみで溢れ、血で血を洗う凄まじい暴動と化してしまっただのである。

IC九州サークルの勉強会では井原先生指導の下、書籍『鋼鉄のシャッター』と同名のVHS（映像）とを活用して学んだ。

著者で、イエズス会神父、心理学者のパトリック・ライスは1972年、北アイルランドの紛争解決を目的に臨床心理学者カール・ロジャーズへ働きかけ、その仲間たちが動いて、自分たちの積み上げた手法（パーソンセンタード・エンカウンター・グループの知識と技術をマスメディアによるコミュニケーション）を活用して創造的に解決につないだ物語である。

パトリック・ライスは「紛争」を終らせるためには現状の責任が誰にあらうとも「解決」の責任は当事者一人ひとりにかかっている。だから、共通の努力をするという協力を通してのみ問題解決が成し遂げられると考えた。集団エンカウターの集団カウンセリング技法を用いると主義主張・思想信条・価値観・文化伝統・人種民族などが異なった人たちでも、相互理解と人格の成長を生み出すことができると決断し、解決への道のプロジェクトをスタートさせた。（『鋼鉄のシャッター』6～7頁）

エンカウンター・グループでは、あらゆる属性上の差異や能力上の高低を乗り越えて、相互尊重と切磋琢磨（人格向上）をし合うコミュニティを作るための人間性尊重の積極的アプローチを実践する。

パトリック・ライスはこのプロジェクトのためにイエズス会の聖職者から平信者へ退位し、尊敬してやまないカール・ロジャーズの理論を体現化、実践。映像の専門家（1968年アカデミー賞受賞『出会いへの道』など）で、カウンセラーのビル・マックゴーはエンカウターのメンバー（北アイルランド紛争の当事者たち）の会話をピッツバーグで撮影。カール・ロジャーズはコミュニケーションの専門家（ファシリテーション、アクティブリスニング）としてメンバーの相互尊重と人格向上をめざし彼らの発言を促し、傾聴した。

危険を承知で撮影に協力してくれたメンバーはカソリック、プロテスタント、中立的立場の人9名でパトリック・ライ斯拉3人とアメリカ、ピッツバーグに集まって合宿し、互いの話し合いの中で変化を待った。個々人の交流に焦点をあてたり、外に現れない感情に近づこうとするとメンバーは抵抗を示した。2日目の夜、会話に対して操作を行わずに必要とする題材を引き出すためにパトリック・ライスはメンバーへ「お互いに人間として接してさえない」ので心配していることを告げる。

メンバーから「心の中に鋼鉄のシャッターを持っている。頭の中に降ろすシャッターでもある。本当の自分はこのシャッターの向こう側に隠れている。その自分を自由にしたら、何か暴力的なことをしかねない、人々に憎悪を感じてしまう」などと次々に発言された。

鋼鉄のシャッターが必要であることをお互いが語り合ううちに、メンバーはさらに自分の体験を表現し始め、その内容に対して別のメンバーから理解できる、自分も同じ気持ちだというような本当の触れ合いが現れ始め、逆に、隠し立てのない意見に衝突も起こった。最も熱のこもった時間であった。最後の数時間にはメンバー間に深い理解が示された。

3日間で24時間撮影した映像を1時間にまとめ、映像の力を活かそうと計画ではマスコミや、教育組織に映像を訓練されたファシリテーターと共に活用を予定していたが、残念ながら実現は一部にとどまった。

しかし、映像はカソリック神父、プロテスタント牧師ら他によって命がけで北アイルランドに広げられ、北アイルランドに変化が芽生えた。観る人に劇的な反応を呼び起こした。憎しみと怒りはすぐには消えなかった、が、信じられないようだが、紛争はしだいに沈静化しはじめた。観た人の言葉に「自分たちの文化や社会に信頼関係を深めていくためのコミュニケーション方法と技術を必要としている」「私たちが求めていることは社会の中心を貫く価値観を変える唯一の方法、人々と関わることだ」などがあつた。（『鋼鉄のシャッター』99頁、110頁）

1987年、ノーベル平和賞にノミネートされたとの報がとどいたとき、カール・ロジャーズは死の直前で意識を無くしていた。ロジャーズは心理学者として、あわせて平和活動家としての名声を得たのである。（『鋼鉄のシャッター』66頁）

カール・ロジャーズは「敵意とか葛藤を解決するためには、たとえ小規模でも、危険を乗り越えていく勇気が必要であることを示した。質問紙による数値、テスト測定の結果などはこの説話的報告(narrative account)から得られる結果ほどには伝えられないであろう」と語つた。

（『鋼鉄のシャッター』ix頁）

現在の北アイルランドは「北アイルランド紛争は終わった」と言えるのだろうか？1966年～1999年の間に3636名の死傷者を出し、1998年には「ベルファスト合意」という協定を結んだ。その後、一気に平和になるのではないが、社会に平和が少しずつ浸透しているのは確かである。テロの脅威はなくなったが、武装組織が解体されたわけではなく活動を続けるグループが隠然と存在する。

（『北アイルランドのインターフェイス』32頁、34頁）

引用文献

パトリック・ライス（2003）『鋼鉄のシャッター—北アイルランド紛争とエンカウンター・グループ』
島瀬稔、東口千津子訳、コスモス・ライブラリー
佐藤亨（2014）『北アイルランドのインターフェイス』水声社